

竹陵書言

一字を書くには、途中で筆をやすめて墨をつぐようなことをできるだけせぬこと。また一枚を書いてしまうまでは休まぬこと。それで気脈一貫したよいものにしようと思えば、練習を十分しておいて、いざ清書という時は、早朝の雑念のない時、または十分ゆったりの余裕のある時、うんと心を引きしめて一気呵成に書くのがよいのです。

（丸山敏雄著『書道芸術』三十七〜三十八頁）

一貫不断

一字の途中で墨をつぐことがないようにしましょう。もし墨つぎをしないと一字がかすれて書けないとしたら、それは墨のつけ方に問題があります。

また、一字の途中で鋒先を整えないとうまく書けない場合は、筆遣いに原因があることが多いです。いずれの場合も、書道講師に相談してください。

一字書くごとに休んだりせず、数文字を続けて書いて、文字がかすれて来てから墨つぎをした方が味わいのある作品が書けます。

また、一枚を書き切るまでは休まないでください。一枚の途中で席を立って、また戻ってきてから続きを

書いても、気分が途切れてしまい、気脈一貫の書にはなりません。

みなさんは清書や作品作りはいつされていますでしょうか。例えば、休日家で書く方もいるでしょう。書く時間は確保できても、その後大事な用事がある日は、普通作品作りはできません。「十分ゆったりした余裕のある時」に書きましょう。

「筆を持つ時間がない」という人がいますが、本当でしょうか。時間は作るものです。敏雄の日記を見ると、どうしてこれだけのことが一日の内にできるのかと驚くばかりですが、その一方で潤い豊かな作品も多く書き遺しています。

私たちも作品作りの時間を確保し、その時ばかりは書道だけに没頭し、一気呵成に書き上げましょう。